■『稲穂』インタビュー⑥／萩本博幸同窓会会長に聞く

故郷飯田に、熱い思いを寄せて

「ものづくり」の精神で、飯田から世界に視野を……

三交代制で、リベット打ち

——萩本会長は「疎開」で飯田に来られ、飯田中学に編入されたと伺いましたが……

萩本　昭和二十年の四月に、飯田中学に入りました。この年の三月十日が東京大空襲の日です。親父（博市氏）がそれを見て、それまで東京にいて頑張っていたんですけれども、もうダメだと。それで故郷の飯田に疎開することになりました。

——そのときの飯田中学も、戦時色一色だったと思いますが……

萩本　飯田中学に編入した翌日に、諏訪の軍需工場へ行けと言われまして、片倉製糸の女子寮に入りました。その女子寮を仕切って、向こうに女子、こっちに男子、真ん中にお婆ちゃんがいました。そこから三菱重工傘下の航空機製作所に動員されて、三交代制で戦闘機の翼のリベット打ちをしました。とにかく腹が減ったことだけはよく覚えています。八月十五日の終戦の日までですね。

——私（岡村）は昭和十九年の四月に飯田中学に入学したのですが、翌年の四月から、飯田中学の建物は豊川海軍工廠の学校工場になりました。

萩本　そのアレンジを私の親父がやったんです。でも、工作機械は一部だけ。その機械を豊橋から飯田線で運んできて、天竜川の河原に置いてありました。そして終戦となったのです。

〝疎開っ子〟は虐められた

——勉強したという記憶はありますか。

萩本博幸さん

飯田中学４年のとき。諏訪の工場へ（後列中央）

萩本　終戦で諏訪から戻ってきたのが八月の末。最初にやれと言われたのが、柏原へ行って薪を拾ってくることでした。冬の暖房用ですね。みんなで背板をしょって、何回も行きました。その年の九月から翌年の二月まで、在籍してはいましたが、ほとんど勉強らしい勉強はしなかったですね（笑）。

――墨で教科書を黒く塗ったころですね。

萩本　帽子に白線が二本あって、マントを着て、足には高下駄。まるで『金色夜叉』の貫一お宮（笑）。

週番というのがあって、殴ってもいいの。ポケットに手をつっこんで歩いて来ようものなら、「たるんどる」と言ってペンペンと殴る。そういう時代でしたね。

――戦後でもありましたか。

萩本　昭和二十年の秋。特に私ら〝疎開っ子〟は虐められましたね。

――東京に戻っても、大変でしたね。

萩本　一面、焼け野原ですからね。府立十一中（現・江北高校）に復学して、旧制の府立高等学校を経て、昭和二十五年にこれも旧制の東京工業大学の機械科に入りました。

卒業のときに新制大学の大学院が設立されたため、親父に「大学院に行け」と言われて、同大学の大学院の修士・博士コースに進みました。そして同三十三年に博士号をいただきました。〝ドクター第一号〟でしたね。専門は今でいう「自動制御」です。

社訓は「正義」と「勤勉」と「向上」

――多摩川精機の成り立ちを教えてください。

萩本　昭和十三年三月三日、私が八歳のときですが、親父の博市が東京・蒲田の多摩川の近くで創業しました。そのとき、故郷の水清き天竜川に思いを重ねて、「多摩川精機」と名付けました。

親父は泰阜村の打沢の生まれ育ちです。東京の青山師

範で学んで、一時期、教鞭をとっていたこともありますが、現在の東京工業大学の機械科に入学し、その後、北辰電気の洗足工場の勤務を経て、独立しました。

その創業当初から、親父は飯田工場の設立を願い、風越山の麓、飯田の大休に七万坪の土地を購入してそこを造成し、昭和十九年四月一日に飯田工場の操業を開始しました（現在は本社、第1事業所）。以来、「技術を育て、技術を売る」をモットーに、技術を磨き上げてきました。

――創業のポリシーを教えてください。

萩本　いつも言っていたのが「正義」と「勤勉」と「向上」の三つで、社訓になっています。「正義」は正しい筋道、真の道理。「勤勉」はよく勤めること。そして「向上」とは進歩することです。

会長インタビュー（2009年4月20日）

ポリシーのひとつは海外に進出しないこと。今、飯田と青森県八戸市に工場がありますが、いずれも地域に密着した工場となっています。

もうひとつは、株式を上場しないこと。いつの時代でも愚直に「ものづくり」をする会社でいたいがためです。

私は新しい「ものづくり」とは、日本独自のオリジナリティのある商品、〝オンリーワン〟であり〝ナンバーワン〟といわれる商品をつくり出すことだと思っています。

世界的な技術水準をもって

――今、百年来の経済危機といわれ、大変な経済不況のなかにありますが……

萩本　たしかに大変ですね。ここ数年は回復しないとも言われています。でも、それとは裏腹に、試作や研究部門は忙しいんです。そのお手伝いをしているのですが、わが社が誇れる技術として、今話題のハイブリッドカーに搭載されている角度センサ「シングルシン」や、航空機に使用されるジャイロ（空間の角度、角速度のセンサ）は世界的な技術水準にあります。また、センサ、モータ、航空宇宙防衛関連にも貢献しております。

――萩本会長が今、一番、力を入れていることは何ですか。

萩本　教育ですね。私の親父も教育には人一倍力を入れておりまして、青年学校をつくっておりました。

私も、平成二十年に信州大学の大学院と提携して、多摩川精機の寄付講座「モバイル制御講座」をつくり、社会人マスターの育成に尽力しております。また、東京工業大学と提携してバイオにも領域を広げ、地元の飯田市とも、平成十八年にパワーアップ協定を締結しました。

朝の六時から八時が、大切な時間

――そのように大変お忙しいなか、飯田高校の同窓会長もお引き受けいただいておりますが……

萩本　飯田中学の卒業証書もいただいていない私でいいのか、と言いましたが、是非にというお話でしたので、長くても二期四年ということでお引き受けいたしました。

今回、「地域貢献」「社会貢献」という言葉を活動方針のなかに盛り込みました。また、来年が独立１１０周年ですので、これも併せて、具体的に取り組んでいきたいと思っております。

――会長はどんな趣味をお持ちですか。

萩本　何もないんだよ、本当に。ゴルフもしない、カラオケもしない。あえて言えば本を読んだりすることですが、実益を兼ねた趣味といえば、新聞なんです。

――新聞？ですか。

萩本　毎朝、新聞の切り抜きをすること。そのために新聞は一般紙から業界紙まで十五紙をとっています。毎朝六時に出社して。もちろん一番早いですよ。まだ誰も出社しておりません。電話も鳴りません。新聞を読んで必要なところを切り抜いてコピーをとる……。これを役員会で発表するんです。この朝の六時から八時が、私の大切な時間なんです。

自ら手づくりのスクラップ

できれば飯田に戻ってほしい

――最後に、飯田高校の卒業生に、何か一言。

萩本　「飯田を忘れるな」ということですね。できれば飯田に戻ってきてもらいたい。今、八％くらいの人しか戻ってきません。もちろん、そのための条件を整えなければなりませんが……。そうして故郷を活性化していきたい。そう思い願って、できる限りのことはしたいと思っております。

〈インタビュー：岡村隆臣（高2回）／構成：清水茂則（高19回）〉